

留学生懇談会の開催と新たな課題

国際交流委員会委員長 田淵五十生

■五十名を超える留学生

五月十日（金）、午後六時から、猿沢荘において、平成十四年度留学生懇談会が開催された。

留学生、指導教官、事務官、チューター、来賓の方々（国際ソロプチミスト、ならシルクロード国際交流財団、奈良市国際交流ボランティア協会、奈良女子大学）、約百二十名が出席し、楽しいひとときを持った。

特に本年度は、新しく入学した留学生から、どのような目的で留学したのか、また、日本にきてどのようなカルチャーショックを感じたかなど、一人ひとりに語ってもらう時間をもった。



留学生懇談会にてコーラスを披露する留学生

来日期間が短いにもかかわらず流暢な日本語で語る留学生、片言ではあるが明確なメッセージをもった留学生など、あらためて留学生の個性を知ることができた。

筆者が留学生に関わるようになって十七年が経過した。当初、留学生数は十名以下で、出身国も台湾、韓国、中国の三カ国に限定されていた。現在、総数は五十一名に増加し、出身国もタイ、インドネシア、ミャンマー、ラオス、ルーマニア、ポーランド、ドイツ、アメリカ等、十五カ国に達している。

■交流なき国際交流室

しかし、留学数の増加が、本学学生の国際感覚の涵養に質的に貢献しているかとたゞされるとう心許ない限りである。というのも、三年前、インドネシアからの日本語・日本文化研修留学生ダニ・ラムダニ君の帰国直前の言葉が、筆者の脳裏に残っているからである。

「この一年間、多くのことを学びました。日本留学には満足していますが、一つだけ残念なことがあります。それは、同世代の日本人男子学生と友達になれなかったことです。」というものである。



留学生懇談会終了後の記念撮影



挨拶する田淵国際交流委員会委員長

昨年、帰国した中国の龍慧星さんも日本人学生と留学生との交流のなさを、附属中学校に招かれた講演で嘆いていた。事実、国際交流室がオープンしたにもかかわらず、日本人学生と留学生の談笑場面を見ることは非常に少ない。

■新しい課題

この懇談会を年一回のイベントに終わらせてはならない。大切なのは、日常的な交流を通して、日本人学生が、自分たちの文化や価値観のありようを見つめ直す機会が与えられることである。「異文化との出会いは自文化の発見である」と言われるように、留学生という迂回路を通して、「日本文化とは何か」を意識的に問い直したり、「同じことがいい」と考えるような同調主義的な行動様式を相対視したり、価値観の多様性に触れたりするような学びの時間と空間を、キャンパス内にどう創造するかである。それが、国際交流委員会の新しい課題である。